

観音物語 (11) 束縛から自由へ

わくしゅうきんか さ しゅそく ひ ちゅうかい ねん び かん の んりき しゃくねんとく げ だつ
或囚禁枷鎖 手足被杻械 念彼観音力 釈然得解脱
とらえ か さ ちゅうかい ねん び かん の んりき しゃくねんとく げ だつ
 或は囚られて枷鎖に禁せられ 手足杻械せられんに 彼の観音の力を念ずれば 釈然として解脱することを得ん

一男は生まれつきの障がい児である。外で遊ぶことがなく、いつも家に籠っている。祭りで賑わっている、室内で音を聞きながら体を揺らして踊っている。

かつて赤子のとき、病院の先生から「脳性小児まひ」と診断された。行く末を悲観した母は、一男を抱えたまま電車に飛び込もうとして土手に登った。ところが、両腕に抱えている赤子がニッコリと笑う。その笑顔で死神が去った。さらに、祖母が観音さまを毎日のように拝んでいた姿をにわかに思い出した。自分も祖母のように観音さまにすがりながら、この子とともに生きていこうと決意した。

不自由な手足の機能訓練のために、学園生活を11歳から始めた。やがて自宅からの通園になり、片道40分は車窓の街並みを楽しむ道のりとなった。毎日の変わらぬ風景をじっと眺めている。一日の中でいちばん歓声を出す時間帯でもある。母は一男の喜ぶ顔を見て外で歩かせることにした。案の定、戸外の散歩をすれば、手足そりくりかえし歩くその姿を見て高校生たちがからかう。

「どうじゃ、あのみっともないカッコウ、どうだ、ほれ、ほれ」

頭を撫でまわし、歩き様を真似てふざけた。

夏の七夕祭りの人込みで歩いたときである。子連れの父親が、「あのカッコウ見よ」と、歩き方のまねをして踊り狂ってからかった。母はたまらなく悲しくなった。

「この子は私の子だよ！」

一男の腕を握った。そして、抱いて見せつけた。

「気ニシナイ、気ニシナイ。ソナコト気ニシテイタラ、毎日気ニスルコトバカリダヨ」

といって母を家に帰らせた。

一男は右足を引きずって歩くから、靴はいつもその部分だけに穴があいてしまう。靴は一週間しか持たない。左の靴は新品でも右はすぐに使えなくなってしまう。靴はいつも十足ずつ買っていた。人に笑われ、ののしられても、毎日のように外へ出た。ある日、通りすがりのママが子どもにひそひそと語った。

「悪いことをしたり、ママのいうことを聞かなかったりすると、あゝした体になるんだよ」

これは絶対に間違った考え方だと思った。新聞の読者欄に投稿した。

「私は好きこのんでこんな歩き方をしているのではない。悪いことをしたり、親のいうことを聞かなかったりしたから、障がい者になったのでは決してありません。人のいうことを気にしていたら町は歩けない。今までぼくたちは隠されてきた。それでは外へ出ることが恐くなる。隠すことは結局、自分が恥ずかしいことなんだ」

障がいの身をさらけ出すのも社会になじむ目的のひとつである。就学12年を終えてから、仲間だけで温泉旅行をするようになった。やがて2人の娘に恵まれた。従業員8名の印刷会社も繁盛している。

以下は釈迦牟尼世尊の説法である。

「手足は不自由であっても、心まで縛られることはない。波に漂う木の葉は自由のようにみえるけれども、実際は波にもてあそばされているにすぎない。主体性があって、我欲のない活動こそが真の自由自在といえよう。観音には十自在力がある。寿、心、財、業、生、勝解、願、神力、智、法がそれである。つまり、寿命や財産、願い、神通力、智慧などが自由自在であるから、『観自在菩薩』というのである」